

「将来を担う大切な子供たちの健全な成長に向けて」

地域内の大人から行うあいさつ声掛け・見守りのお願い

つくばみらい市区長会

【コロナ禍による現状】(社説より一部抜粋)

コロナ禍の中で3回目のこどもの日を迎え、学校などでの活動は長く制約されてきたが、感染対策を講じつつ、以前の学校生活に戻す動きが各地で広がっている。

子供たちは、勉強だけでなく、様々な行動や活動を通じて周囲の大人や友達とふれあい成長していく。

2年以上に及ぶ自粛生活は、子供に多くの影響を与えた。

国立成育医療研究センターが実施した調査によると、子供がづらくなった場合の対応を聞くと「誰にも相談しないでもう少し自分で様子を見る」と答えた人が小学校5~6年生の25%、中学生の35%に上った。

うつ状態になっても、それを言い出せずにいる姿が浮かび上がる。

親に心配させたくない考える子や、心の状態をうまく言葉にできない子も少なくないのではないか。周囲が異変に気づき、手を差し伸べる必要がある。

○ 中央教育審議会(HP)より抜粋「これからの地域社会における教育の在り方」

子供たちに「生きる力」を育てていくためには、学校で組織的・計画的に学習する一方、地域社会の中で様々な年齢の方々と交流し様々な生活体験、社会体験、自然体験を豊富に積み重ねることが大切である。

そして、何より大切なことは、地域の大人たちが手を携えて、子供たちの成長を温かく見守りつつ子供たちを育てていく環境を醸成することであると考える。

【地域内における現状：参考一部抜粋】

コロナ禍への対応を含め、地域内における距離感の取り方が難しくなってきています。思いやりの一言がかけられなくなっているところか、基本の挨拶自体が希薄になりすぎているきらいがあります。

私が子供の頃は、近所の方と出会ったときには必ず「おはよう・今日も暑く(寒く)なりそうですね」「行ってらっしゃい。お気をつけて」と声をかけてもらっていました。

子供ながらに面倒だと思ったこともありましたが、「見ていてくれている・気にかけてもらっている」という安心感、嬉しさも感じていました。

あいさつプラス声掛けは、ご近所との良好なお付き合いの基本です。